

live coverage

KUNST ARZT では、大西晃生の初個展を開催します。
大西晃生は、ネット社会下で変化した人間と存在、
自他の関係性を考察するアーティストです。
インターネット上で収集したポートレートを印刷し、
変形させたものを描いた絵画で構成するインスタレ
ーション「何だって分かる、自分のこと以外なら」(2019)
では、ネット社会によって抵抗できないまま歪んでいく
我々の姿を映し出し、水が打ちつけられるキャンバスに
スプレーを吹き付けようと試みる映像作品「無駄骨(関
係)」(2017)では、過酷な状況下でも表現で抗うアーティ
ストの意思を感じさせました。
ご注目ください。(KUNST ARZT 岡本光博)



still life #6 2018
キャンバスにアクリル絵具

経歴

1996年 岡山県生まれ
2019年 京都精華大学 デザイン学部イラスト学科 卒業

展覧会歴

2018年「CAF 賞 2018」代官山ヒルサイドテラス (東京)
2019年「東下」rusu (東京)
2019年「孤独と連帯」プライベート (東京)
2019年「ALLNIGHT HAPS 2019 後期「Kangaru」」HAPS オフィス 1F (京都)

2020年6月16日(火) から 21日(日)
12:00 から 18:00

会 場 : KUNST ARZT
605-0033 京都東山区三条神宮道北東角 2F

live coverage

展覧会内容・コンセプト

バーチャルな時代において、虚構は虚構としてではなく現実として捉えられるようになった。それが真実か否かということが重要なのではなく、それを信じたいから信じる。流れてくる情報の真偽云々よりもそれが評価されているかどうかでそれが事実となってしまう時代だ。共同体が崩壊し、個人化が進展した現代において、私たちの生活は一方的に見る / 見られる、という関係へと変容した。私はこのような世界で起こる様々な事象に対して違和感を感じると同時に、そこからどのような事を考え、行動に移すかが大事だと考える。それは例えば虚構の世界に暮らしていたトゥルーマンが、この世界の構造やシステムに気づいてしまったときのように。私たちは私たちの世界に違和感を感じたとき、何を思い行動するのだろうか。

アーティスト・ステートメント

現代の環境によって変化した人間と存在、自他の関係性について考え制作している。SNSをはじめ、オンラインとオフラインに継ぎ目がなくなり、現実と虚構が渾然一体となりつつある現代では、社会と個人の境界も非常に曖昧になってきているような感覚がある。オープンで常に誰もが繋がっている社会というのは、それぞれがそれぞれを相互に監視する窮屈な社会ともいえる。休むことなく回り続けるこの社会の中で、私たちが抱える違和感について考えている。



何だって分かる、自分のこと以外なら
2019
インスタレーション

インターネット上で収集したポートレートを印刷し変形させたものを描いたシリーズのインスタレーション。匿名の他者のポートレートであり、印刷物を描いた静物画でもある。タイトルはフランソワ・ヴィヨンの詩、「軽口のバラード」を引用。



無駄骨（関係）
2017
映像、ラッカー、パネル

描いても描いても自分ではないと否定されるような感覚を、水が打ちつけられるキャンバスにスプレーを吹き付け、定着させようとするナンセンスな行為に置き換えた。描く事に対する諦めと、それでも描こうとする事、または画面へ集中する事の記録。